

園芸タイムリー情報

《7月中・下旬版》

令和2年 7月16日発行 第5号
 上川農業改良普及センター
 Tel: 0166-84-2017 Fax: 0166-84-2009
 E-mail: asahi-nokai.11@pref.hokkaido.lg.jp
 HomePage: http://www.kamikawa.pref.hokkaido.lg.jp/ss/nkc/index.htm

全作物共通


- 天気は数日周期で変わり、平年に比べ曇りや雨の日が多く、平均気温は平年並みから高い見込みです。
- ①長期どりの果菜類は着果負担が大きくなっています。換気やかん水、追肥等を適切に行い、草勢維持と着果安定に努めましょう。
 - ②遮光資材を利用する場合は曇天時の被覆は避け、過度な遮光とにならないようにしましょう。
 - ③病害虫の発生が増加します。ほ場観察を行い、薬剤のローテーションを考え、適切な防除対策を実施しましょう。
 - ④熱中症防止のため、適度な休憩と水分・塩分補給を行いましょう。

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名	あぶらな科野菜全般	
病害虫 生理障害名		
キスジノミハムシ		
発生状況	こまつな葉部食害	
中発生	ラデッシュ根部食害	
発生時期	キスジノミハムシ成虫 (体長2~3mm)	
6月上旬~		
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 成虫は葉、幼虫は根の表皮を食害する。 気温の上昇に伴い、7月から成虫の発生が増加している。 7月~8月に発生がピークとなる傾向がある。 		
<ul style="list-style-type: none"> ●成虫期間：1~4ヵ月 ●卵期間：5~7日 ●幼虫期間：10~20日 ●蛹期間：3~15日 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 成虫の多発時は防除効果が劣るため、ほ場をよく観察し、発生初期防除に努める。 土壌施用剤は、土壌水分が極端に低下すると効果が劣るため、かん水管理に留意する。 ハウス内外の雑草や残さを適切に処分し、発生密度を高めないようにする。 		
＜防除の一例＞		
こまつな		
●フォース粒剤 4kg/10a は種時全面土壌混和 1回		
チンゲンサイ		
●スタークル粒剤 6kg/10a 定植時土壌混和 1回		
チンゲンサイ・ターサイ・みずな・こまつな		
●モスピラン顆粒水溶剤 4,000倍 収穫7日前まで1回		

作物名	あぶらな科野菜全般	
病害虫 生理障害名	コナガ成虫	
コナガ		
発生状況	幼虫による葉の被害	
少~中発生		
発生時期	コナガ幼虫	
5月下旬~		
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 幼虫が葉裏に潜み、葉を食害する。 5月上旬に成虫の初発が確認され、5月下旬から幼虫の発生が見られている。 7月下旬に発生のピークとなる傾向があるので注意する。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場内外の雑草をこまめに除草する。 防虫ネット(目合1.0mm)は、侵入口となる隙間を作らないよう設置する。 品目により薬剤の登録内容が違うので、ラベルを確認してから使用する。 ジアミド系(プレバソンフロアブル5等)の薬剤抵抗性個体群が出現している。防除効果が劣る場合は他系統の薬剤に切り替える。 		

作物名	あぶらな科野菜全般	
病害虫 生理障害名	ウスカワマイマイ	
ナメクジ類 カタツムリ類		
発生状況	チャコウラナメクジ	
中発生		
発生時期		
5月上旬~		
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 葉の食害の他、フンや本体の混入が問題となる。 雨上がりや夜間は活発に活動する。 6月以降被害が目立っており、今後も注意が必要である。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場周辺の雑草はすみかとなるため、こまめに除草する。 スラゴを使用する場合は作物周辺あるいは株元の土壌表面に散布し、作物に付着しないように気をつける。 ナメクジ・カタツムリは、ほ場周辺の雑草地、石の下、日陰など暗くて湿気の多い場所に好んで生息することから、これらの場所へ重点的に散布する。 		
＜防除の一例＞		
●スラゴ 1~5g/m ² (3.3~16.5g/坪) 発生時		


作物名	きゅうり
病害虫生理障害名	
べと病	
発生状況	
中発生	
発生時期	
7月上旬～	葉裏に生じたカビ

発生の状況・要因

- ・始めは、葉脈に囲まれた角形で黄色の病斑を形成し、古くなると褐変する。
- ・褐斑病と良く似ているが、べと病は病斑が黄色味を帯び、葉裏にかびを生じることから判別できる。
- ・曇雨天が続いたり、ハウス内が多湿となると発生しやすい。また、肥料切れでも発生が助長される。

対策

- ・適正な管理で草勢を保つとともに積極的な換気を行い、ハウス内湿度を高めないようにする。
 - ・発病初期に防除を開始する。
- <防除の一例>
- プロボース顆粒水和剤 1,000～1,500倍 収穫前日まで 3回以内
 - ライメイフロアブル 2,000～4,000倍 収穫前日まで 4回以内

作物名	きゅうり
病害虫生理障害名	
褐斑病	
発生状況	
少発生	
発生時期	
7月上旬～	発生初期の病斑 病斑の特徴

発生の状況・要因

- ・葉に淡褐色の小斑点が発生し、やがて拡大して病斑上に黒っぽいカビを生ずる。
- ・べと病と間違えやすいが、褐斑病は病斑が丸みをおびて、表面にかびを生ずる。
- ・生育適温28℃、高温多湿条件で発生する。6～10月に多発する。
- ・草勢が衰えている場合に多発しやすい。
- ・ハウス内の土壌や資材に菌が付着し、翌年の発生源となるため、以前に発生したことがあるほ場では特に注意が必要となる。

対策

- ・適正管理で草勢を保つとともに積極的な換気を行い、ハウス内湿度を高めないようにする。
 - ・昨年発生したほ場では、予防防除を行う。
 - ・ほ場をよく観察し、発病葉は摘除する。
 - ・薬剤耐性菌の出現を防止するため、同一系統薬剤は連用しない。
- <防除の一例>
- プロボース顆粒水和剤 1,000倍 収穫前日まで 3回以内
 - ジマンダイセン水和剤 600倍 収穫前日まで 3回以内
 - スミブレンド水和剤 1,500～2,000倍 収穫前日まで 5回以内


作物名	すいか・メロン・きゅうり
病害虫生理障害名	
うどんこ病	
発生状況	
少発生	
発生時期	
7月上旬～	きゅうりの葉表に発生した白いカビ

発生の状況・要因

- ・葉や茎の表面にうどん粉をふりかけたような白斑を生じ、多発生の時は果柄やへたなどにも発生し、商品価値が低下する。
- ・例年、生育後半に発生が多くなるが、今年の乾燥条件により発生が早まった。
- ・過繁茂になると発生しやすい。

対策

- ・ほ場を乾燥させすぎない。
 - ・初発を確認したら薬剤散布を実施する。
 - ・被害葉や果実は摘除し、残さは適切にほ場外へ搬出する。
- <防除の一例>
- フルピカフロアブル
すいか・メロン・きゅうり：2,000～3,000倍 収穫前日まで 4回以内
 - ストロビーフロアブル
きゅうり：3,000倍 収穫前日まで 3回以内
すいか・メロン：2,000～3,000倍 収穫前日まで 3回以内
- ※ストロビーフロアブルへの浸透性展着剤の加用は葉害を生じる恐れがあるので避ける。

作物名	すいか・メロン・きゅうり
病害虫生理障害名	
ハダニ類	
発生状況	
少発生	
発生時期	
6月上旬～	きゅうり すいか メロン

発生の状況・要因

- ・葉の裏に寄生し、吸汁により葉の表に白いかすり状の斑点が現れる。発生密度が高くなると葉全体が黄変枯死する。
- ・高温乾燥を好むため、ハウスでは露地よりも早く発生する。

対策

- ・ほ場をよく観察し、発生初期の低密度のうちに防除する。
 - ・ハウスでは、侵入しやすい出入り口やサイドなどの開口部付近を中心に、よく観察する。
 - ・薬剤抵抗性の出現を防止するため、同一薬剤は連用しない。
- <防除の一例>
- マイトコーネフロアブル 1,000倍 収穫前日まで 1回
 - ダニサラバフロアブル 1,000倍 収穫前日まで 2回以内

作物名	すいか・メロン・きゅうり	
病虫害生理障害名		
菌核病		
発生状況	菌核病菌が検出されたすいかの葉の症状(下)	
中発生		
発生時期	5月下旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> つるの分岐部や果実の花落ち部に白色のかび(菌糸)を生じて腐敗し黒色の菌核を形成する。 20℃前後の比較的低温が続き、多湿の場合に発生が多くなる。 すいかやメロンでは、着果期を過ぎ、茎葉が繁茂したハウスで発生が多くなる。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 換気を心がけ、ハウス内温度の低下に努める。 着果期前より予防防除を実施する。 被害茎葉・果実は見つけしだい除去し、ほ場外へ搬出する。 <防除の一例> ●スミレックス水和剤 すいか 1,000～2,000倍 収穫7日前まで 5回以内 メロン 2,000倍 収穫前日まで 3回以内 きゅうり 1,000～2,000倍 収穫前日まで 6回以内 ※スミレックスくん煙顆粒は、メロンに登録がなく使用できない。 ●カンタストライフロアブル すいか・メロン・きゅうり 1,000～1,500倍 収穫前日まで 3回以内		

作物名	すいか・メロン・きゅうり	
病虫害生理障害名		
アブラムシ類		
発生状況	少発生	
発生時期	6月上旬～	
すいかに発生したアブラムシ(左)と被害葉(右)		
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 葉の裏に群生し、吸汁害による茎葉の萎凋、排泄物による葉や果実の汚れが発生する。 ハウス内は温度が高く、露地よりも増殖が早いので注意する。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場をよく観察し、発生初期の低密度のうちに防除する。 薬剤抵抗性の出現を防止するため、同一薬剤は連用しない。 <防除の一例> ●ウララDF きゅうり 2,000～4,000倍 収穫前日まで 3回以内 すいか・メロン 2,000～4,000倍 収穫前日まで 2回以内 ●アディオン乳剤 きゅうり 2,000～3,000倍 収穫前日まで 3回以内 すいか・メロン 2,000～3,000倍 収穫前日まで 5回以内		

作物名	パセリ	
病虫害生理障害名		
うどんこ病		
発生状況	発生に注意	
発生時期	7月下旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 葉の表面が白色粉状のかびに覆われる。 気温28℃前後で、乾燥した条件下で発生しやすい。 7月下旬以降、発生に注意する。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場を乾燥させすぎない。 発生前から予防的に薬剤散布を実施する。 発病した葉は摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。 <防除の一例> (発生前) ●クリーンカップ 1,000～2,000倍 収穫前日まで — ●クムラス 500～1,000倍 — — (発生前～発生初期) ●アフェットフロアブル 2,000倍 収穫3日前まで 2回以内		

作物名	さやえんどう・さやいんげん	
病虫害生理障害名		
アザミウマ類		
発生状況	少発生	
発生時期	7月上旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 莢に産卵すると火膨れ症状となり商品性が失われる。 高温乾燥条件で発生が多くなり、周辺雑草(特に黄色や白の花が咲くもの)が多いと被害は大きい。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場周辺の除草に努める。 アザミウマ類は花の中にいるので、花の中をよく観察し、発生が多くなってきたら、薬剤による防除を行う。 使用できる農薬は両作物で異なるので、登録内容を良く確認して使用する。 		

作物名	トマト・中玉トマト・ミニトマト	
病虫害 生理障害名		
発生状況	葉の病斑とかび がくから感染した腐敗果実	
発生時期	4月下旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 天候が回復し発生は減少している。 20℃位のやや低温と多湿で多発し、特に多湿条件や植物体が濡れている状態が続くことが発生に影響する。 枯れた花弁、がく枯れ部、植え傷みや葉先枯れて傷んだ葉等の枯死部分などから侵入し発生しやすい。 芽かきや摘葉後の枯死部分から侵入し、株が枯死する場合もある。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 芽かきや摘葉は、晴天日の午前中に終わらせ傷口を乾かす。 換気を心がけ、必要に応じて下葉を摘除し通気性を確保する。 夕方の薬剤防除や葉面散布は避け、速やかに乾く晴天日の早朝に行う。 花弁や発病した茎葉、果実は取り除き処分する。 <p><防除の一例></p> <ul style="list-style-type: none"> ●ダコニール1,000 1,000倍 収穫前日まで トマト（果径3cm以上） 4回以内、ミニトマト 2回以内 ※予防剤のため発生のおさまったほ場での再発防止に使用する ●ファンタジスタ顆粒水和剤 2,000～3,000倍 収穫前日まで 3回以内 ●アフェットフロアブル 2,000倍 収穫前日まで 3回以内 		

作物名	トマト・中玉トマト・ミニトマト	
病虫害 生理障害名		
発生状況	葉かび病・すすかび病	
発生時期	5月上旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 葉かび病の発生が増加している。 両病害とも葉表に黄色の病斑を形成し、葉裏にかびが見られる。 すすかび病では、進展すると葉表にもかびを生じる場合がある。また、すすかび病発生後に葉かび病も併発する例が多く見られる。 葉かび病は20～25℃、すすかび病は26～28℃で発生しやすく、共に多湿条件で発生が多くなる。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 下葉から発生し、徐々に上位葉へ広がるので、ほ場をよく確認し、被害葉の除去と薬剤防除を行う。 葉かび病は草勢が低下すると発生が増加するので、かん水管理や追肥遅れに注意する。 <p><防除の一例></p> <ul style="list-style-type: none"> ●トリフミン水和剤 葉かび病：3,000～5,000倍 収穫前日まで 5回以内（※） すずかび病：3,000倍 収穫前日まで 5回以内（※） （※トリフミン水和剤はトリフミンジェットと合わせて5回以内） ●ファンタジスタ顆粒水和剤 2,000～3,000倍 収穫前日まで 3回以内 		

作物名	トマト類（大玉、ミニ、中玉）	
病虫害 生理障害名		
発生状況	アザミウマ類	
発生時期	6月中旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> トマトで産卵痕による白ぶくれ症状が見られた。 高温乾燥時に多発する傾向にあるので、今後の発生に注意する。 葉にかすり状の白い食害痕や、果実への産卵で白ぶくれ症状が発生する。 ミニトマトではミカンキイロアザミウマの食害で金粉症状を示す。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ハウス周辺の雑草が多いと侵入が増えるので除草する。 葉の食害や開花中の花を観察し、発生初期に薬剤散布する。 青色粘着板は本種の予察に有効である。 <p><防除の一例></p> <ul style="list-style-type: none"> ●ディアナSC アザミウマ類 2,500～5,000倍 収穫前日まで 2回以内 ●ウララDF ミカンキイロアザミウマ 2,000倍 収穫前日まで 3回以内 ●モスピランジェット ミカンキイロアザミウマ 50g/400ml（床200ml×高さ2m） 収穫前日まで 3回以内 		

作物名	ピーマン・ししとう・なんばん	
病虫害 生理障害名		
発生状況	アブラムシ類	
発生時期	6月上旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> モモアカアブラムシの発生が見られている。 モモアカアブラムシの体色は赤、緑、黄で、生長点付近や上位の新葉などに多く見られる。 ワタアブラムシの体色は黒、緑、黄で、下葉の葉裏に多く見られる。 ジャガイモヒゲナガアブラムシが発生する場合もあり、葉の変形や黄化が見られる。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 多発すると防除が困難になるので、マルチに落ちた白いゴミのような抜け殻や甘露（べとべとした排泄物）を手がかりに初発を見逃さないよう努める。 発生初期は一部の株に寄生が集中するので、発生量の少ないうちは寄生された葉を取り除き広がるのを防ぐ。 下葉の裏側や、重なり合った葉、生長点付近の未展開の葉等に寄生している場合が多く、薬剤がかかりづらいので、丁寧に行う。 <p><防除の一例>カブリダニ類の導入時にも使用可能</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ウララDF 2,000～4,000倍 収穫前日まで 2回以内 <p>ピーマン・ししとう・なんばん</p> <ul style="list-style-type: none"> ●チェス顆粒水和剤 5,000倍 収穫前日まで 3回以内 		

作物名	ピーマン・ししとう・なんばん	
病虫害生理障害名		
ハダニ類		
発生状況	少発生	
発生時期	6月中旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 6月中旬頃から一部ほ場で発生が見られた。 高温で増殖が早くなるため、天候回復後に注意が必要である。 葉表の黄変と葉裏の褐変症状が見られ、加害部位には微少なダニが見られる。 密度が増加してくると細かな糸で巣を作り、薬剤が直接かかりづらくなるため防除が困難となる。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 多発すると防除が難しくなるので、初発を見逃さないようにする。 抵抗性が発達しやすいので各薬剤は年1回のみ使用が望ましい。 天敵（スパイカルプラス）を導入しても発生が目立つ場合には天敵に影響の少ない剤で一度防除を実施する。 <p><防除の一例> カブリダニ類導入時に使用可能（なんばんは登録なし）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ニッソラン水和剤 <ul style="list-style-type: none"> ピーマン 2,000～3,000倍 収穫前日まで 2回以内 ししとう 3,000倍 収穫前日まで 2回以内 ●マイトコーネフロアブル <ul style="list-style-type: none"> ピーマン 1,000倍 収穫前日まで 1回 <p>カブリダニ類導入時には使用不可</p> <ul style="list-style-type: none"> ●コテツフロアブル 2,000倍 収穫前日まで 2回以内 		

作物名	ピーマン、ししとう、なんばん	
病虫害生理障害名		
病虫害生理障害名	ヨトウガ・オオタバコガ	
発生状況	少発生	
発生時期	6月下旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 発生は少なめだが引き続き注意が必要である。 ヨトウガは6月下旬から1期目成虫の発生が見られる。初め幼虫が集団で葉を食害し、成長に伴い分散し、食害量も増加する。 オオタバコガは飛来性害虫で、既に発生が確認されている。幼虫は一頭ずつ分散し、果実へ食入する性質が強い。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 成長した幼虫には薬剤が効きづらくなるので、発生初期に登録のある薬剤で防除を行う。 <p><防除の一例> カブリダニ類導入時にも使用可能</p> <ul style="list-style-type: none"> ●プレオフロアブル <ul style="list-style-type: none"> タバコガ類 1,000倍 収穫前日まで 2回以内 ●ゼンターリ顆粒水和剤 <ul style="list-style-type: none"> ヨトウムシ1,000～2,000倍 オオタバコガ1,000倍 発生初期但し、収穫前日まで 回数制限なし <p>カブリダニ類導入時は使用不可</p> <ul style="list-style-type: none"> ●コテツフロアブル <ul style="list-style-type: none"> オオタバコガ 2,000倍 収穫前日まで 2回以内 		

- ◆農薬の使用に当たっては、使用基準を必ず守りましょう。
- ◆防虫ネット・近紫外線カットフィルム・粘着シートなどを活用し、適切な栽培管理と合わせ、病虫害の発生を最小限に抑制しましょう。

※この情報は、上川農業改良普及センター本所地域(旭川市、鷹栖町、当麻町、比布町、愛別町、上川町)向けに作成されています。気象・土壌条件・作業体系から当地域以外には、適用されませんので十分ご注意ください。(不利益・損害などが発生した場合、当方は責任を負うことはできません)

※掲載されている農薬情報は、令和2年7月8日現在の登録内容となっていますので、活用の際は、あらかじめ安全使用基準を確認くださいますようお願いいたします。

■□■□■□■□ GAP手法の活用【農薬編】□■□■□■□

—適正な農薬使用は整理・整頓・散布時の確認から—

- 農薬は、「保管～準備～使用～使用後」の各段階で、適切な管理を行いましょう。
- 農薬は、保管管理の徹底及び盗難、紛失の防止に万全を期しましょう。
 - 作業の前には農薬のラベルをよく読み、使用方法及び注意事項を確認しましょう。
 - 作業時には防除衣・防除具を着用するとともに、作業後は手洗い・うがいを励行し、入浴して着替えましょう。
 - ドリフト防止のため、薬剤の特性に基づいたノズルを選択し、低圧散布を心がけましょう。
 - 散布残液や散布機の洗浄水は、河川や用水路等へ流入しない方法で処理しましょう。